みんなの童話

海と空のあいだ

　夜中じゅう吹いた風もやみ、海になぎがもどった。そよ風が、昨夜の嵐に変わって、砂浜をなぜていた。

「おだやかな日だぁ」

　作造は、空をあおいでつぶやいた。

「なんぱせんだぁ」

　ふいに耳をつんざくようなさけび声がした。

「ななぁんだぁ」

　声の方に顔を向けた作造は、市松の走りよるすがたを見つけた。

「作う、船が浜に上がったぞぉ」

「なんの船だぁ」

　作造もつられて大声で聞いた。

「なんのかもねえだ。安ん家の船だ」

「安う？昨日のようなあんな日いに、船さ出ていったんかね」

「出ていったんは、だれもしらんかったからね」

「あぁ、しっとたらみんなぁで、止めたもんなぁ」

　顔をしかめた市松の声が、作造の心をしめつけていた。

「そんで、安吉は上がらんとね」

「今はなんともわかんねだぁ」

　作造と市松は、浜の端にあるみさきを目ざして急いだ。空はあおあおと光り、海もきらきらと輝いていた。

「おぉ」

　みさきをまわった作造は、思わずうなった。

　端切れ板になった船の残がいが、作造の目にはいった。さけた板目は、どれも断ち割れ、嵐のすさまじさを見せつけていた。

　みさきの浜には、もう船頭なかまが、集まっていた。

「作う、どげん思う、安吉は、ほんとうにあんな海に、いったんやろか」

「どげんちゅうて、今おらんというのが、出ていったんちゅう証拠やね」

「そんで、安吉のおっかさんには、知らせたんか」

「あぁ、今、船頭なかまが、言いにいっとるはずや」

「どげんな顔、しっとらっしゃるか」

「大事ぃな、あととり息子なんで」

「嫁も決まったと聞いとったしなぁ」

「となり村の器量よしと、もっぱらのうわさだったが」

「これでさい先いいと、仲間うちでは、うらやましがられていたぞぅ」

　船頭のなかまで話をしてるところに、安吉の母親が転がるように走りよってきた。

「あぁぁあ、安ぅの船が、こげんことになっとるっちゅうはぁ」

　体をよじるようにして泣きさけび、端切れ板を胸にかきいだいた。

「なぁ、おっかさん。安吉は、ほんとうにあんな嵐の夜に、船ば出したんかねぇ」

「なんもかもねぇだ。きんのう、安と口ばげんかをしてのう」

　安吉の母親は、泣きながらも気丈に、きのうのことを話し出した。

「さいきん嫁が決まったとたん、船頭を休むことが多くなった。小島の多いこの浜では、大事ぃな船頭だでと、しかったんだが、ぷいと出ていったきりで」

「そりゃぁ、安ぅもうれしかことで、うかれとっかんかねぇ」

「きつう、しかりとばしたんやないけん。まさかひと晩帰ってこんちゅうことはと、ふしだらにも、もう嫁ばのとこにでも、いっとるんかと」

「それが行っとらんのかねぇ」

「朝はように、使いば出したら、嫁は来とらんというに」

　安吉の母親は、ぶつぶつと、となえごとをして、海に向かって手を合わせた。

「わぁあぁ、安がぁ。海から手をばふっとるよ」

　安吉の母親は、腰をぬかさんばかりにおどろきながら、波のかなたを指さしていた。

「やぁ、安が海の中からあらわれた」

「手をばふって、もどってくるぞ」

「ななっ、なんかに乗っているぞ」

「まさか！　大がめかぁ」

「今の世に、浦島じゃぁなけんのに」

「えぇい、ありゃあイカダだ」

「おぉぃ安う、どげんことにぃ、なっとるちゅうねん」

「あぁあ、むこう島で、嵐の止むのを待ってたけんど。船さ流されてなぁ、困っていたんだが」

「安吉、心配させよってからに」

　安吉の母親は、涙でくしゃくしゃになった顔で、浜に上がってきた安吉をだきしめた。

「おっかさん、わしは嫁ばもらえることで、海さこわくなっとったよ。そこで、むこう島で一人でもがんばれると気ぃひきしめてきたんだが」

「気いだけしめても、船さなくなったら。おまえはまだ半人前だで、いきなり一人前はないぞ。嫁とだんだん家さ作っていけろ」

　安吉は、母親にだかれながら、うんうんとうなずいた。

しろやま会員　かど　まさこ